人生 100 年時代の生き方事例

パソコンサポートボランティア Dream Navigator Yokohama 2019/11/7 宮田 芳光

S41年(1966年) NEC 入社、当時できたばかりの衛星通信開発本部に配属。専門は機械設計・構造設計分野です。従って専門的なソフトウェアの話はできません。

私も77歳、首記のようなタイトルならば、リタイヤ前後の履歴とボランティア活動への変遷について話すことは可能ということで今回引き受けました。

業務は通信機器それも国際間の無線通信いわゆる大型パラボラアンテナの設計が主でした。地上系のアンテナも含め多種多様なアンテナの設計に携わりました。コミュニケーションツールの設計という点でも多忙でしたがやりがいのある仕事でした。

しかしデスクワークが主であり40歳ころには何か物足りなさも感じていました。

そのような中で昭和58年7月末、山陰地方に700mm以上の大雨が降り、島根県の三隅川上流の美都町が被災し道路も通信網も断絶、陸の孤島となりました。その時私が携わった多目的車載型衛星通信地上局を急遽現地に運ぶことになり、設計者も来てほしいという要請を受け夜行のブルトレで横浜を出発しました。行けるところまで列車を使い、そのあとは車で現地に近いところまで行き、最後は車載型衛星通信地上局を車両から外し、分割して自衛隊のヘリコプターで被災地に運ぶという離れ業を行いました。想定外のこともありましたが何とかクリヤし陸の孤島からの衛星通信網を実現させることができました。

この時被災地の方々から「水も食料も大事だが通信網も大事」ということで大変喜ばれ 感謝されました。そして同時に今まで感じていた物足りなさへの回答を得ることができま した。

「対人関係が密になることをやろう」と。

ところがこれを実現することが困難でした。「対人関係が密になること」とは何だろうか?その模索が始まりました。いろいろなところに出かけてみましたが、自分に適したことを見出すことはできませんでした。仕事が忙しくなったり、職場が変わったりして探し始めて10年以上経過してしまいました。

そのような中 JD (日本障害者協議会) プロジェクトによる「パソコンボランティア」という書に出会いました。1997 年 7 月末です。そこから ML による申し込みにより「技術ボランティア」というグループに参加しました。小田原にある国立療養所箱根病院にて月一回のパソボラ活動が始まりました。

その後、ソフト分身会社に異動(1998年7月)本社が新横浜にあり、パソボラ活動も地元のパソコンサポートボランティア Dream navigator Yokohama(通称 DNY)にシフトしました。活動拠点は横浜ラポール(横浜市の障害者スポーツ文化センター)でした。まさに地元です。DNY の特徴は障がい当事者がメンバーに多いということです。障がい者向けパソボラ活動には同じ障がい者による対応が一番です。

1999年11月横浜ラポールにて「芸術市場」があり、そこで「パソコンで夢を」と題したイベントをDNYが主体になり開催、同時に私所属の分身会社社員に呼び掛け、そのイベントに30名程参加していただきました。受付ばかりでなく、アクセシビリティが必ずしも良くない横浜線を利用して来られる方々へのサポートも行いました。

その時 NEC 本社の CSR 推進本部では社会貢献活動の一つとして、Make a Difference Day(略称 MDD)を開催。そこで活動の Award として申請したところ、第一回の MDD Award として見事表彰され本社 CSR 推進本部とのつながりができました。

DNY の事務所がアスタ PC という横浜市地域作業所にあり、作業所との接点も生まれました。

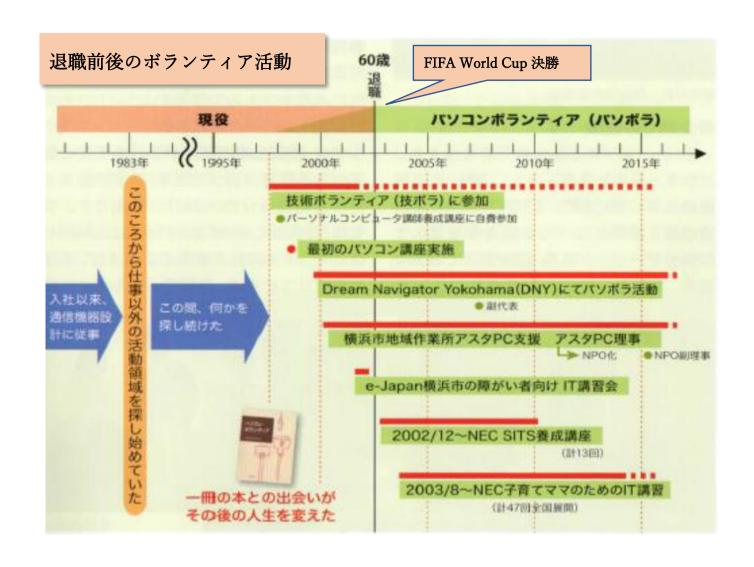
また 2001 年国策として行われた、全国 550 万人への IT 講習に際し、DNY は横浜市に掛け合い、横浜市の障がい者対象の IT 講習は我々に実施させてほしいと持ち掛け、結果 250 名ほどの障がい者への IT 講習を実施することができました。

このころは退職時期が近づいていましたが、会社以外での身の置き所が十分にあるとわかってきましたので、リタイヤ後にどこかに再就職することを考える必要もなくなりました。リタイヤ前後から本社 CSR 推進本部から相談を持ち掛けられ、話し合いの中から NEC シニア IT サポーター養成講座を立案、横浜以外では北九州、沖縄、富山、高松などで行いました。

さらに子育てが一段落したお母さん方が社会復帰するときにはパソコンスキルが求められるということで「子育てママのための IT 講習」を講師として引き受けることになりました。窓口は新座市にある「NPO 法人新座子育てネットワーク」がまとめ役です。教材は大変な作業でしたが HTML+CSS+JavaScrit による自作。託児付きという講座であり、このイベントは当初考えてもいなかったほどの人気を呼び、結局足掛け 10 年、札幌から沖縄まで 47 回続きました。

これらを時系列にまとめたものが次の絵です。退職は2002年6月28日(金)、おりしも同月30日がFIFA World Cupの決勝戦で新横浜駅前は大賑わいでした。

振り返りますと、まずは何か行動を起こすことが第一。すると予期せぬプラスのスパイラルが回りだし外部からも活動依頼が舞い込んでくる。生きがいにも通じる。引き受けるためには自ら健康にも留意することにもなる。というように気が付けばうまく歯車が回っていました。もちろん運もあると思いますが。



「プログラミング教室」をやろうとした経緯

2018年8月及び10月に別々の知人から「プログラミング教室」への要請がありました。当初はその知識がないとお断りしましたが、二度目はどんなことが求められるのか話を聞きに出かけました。そこで Scratch を知り、Raspberry Pi を知りました。Scratch を試行するとともに、Raspberry Pi 及びいくつかの付加機材も入手しました。

文部科学省の「小学校プログラミングの手引き」を何度か読み、このままではうまくいかない何とかしなくてはとの思いから、先生方向け教材となるものを作ってみようと、昨年末からスタートしました。2019年1月3日にはScratch3.0にVersion Up。3月に近隣のコミュニティハウスに話を持ち掛け、小学生と保護者に対し8月の夏休み中に「体験会」という形で一度開催することになりました。さらに9月からは月2回のペースでシリーズ化して開催することになりました。本来は小学校の先生方に参加していただきたかったのですが、忙しいということでなかなか参加していただけませんでした。せんせいがたの実態は次のようです。

https://resemom.jp/article/2019/04/26/50334.html (教育ネット)

2019年4月26日

「教職員のプログラミング授業の実施経験」なし85%、教育ネット調べ

У ツイート

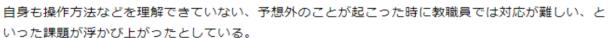
f おすすめ 257

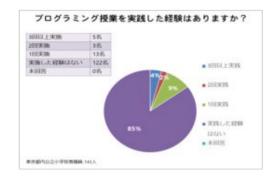
B! Bookmark 1

教育ネットは、東京都の公立小学校教職員148名を対象に、プログラミング教育に関する意識調査を 行い、26日その結果を公開した。

それによると、プログラミング授業の実施経験なしと答え た教職員が85%、実施に対してとても不安、少し不安と答 えた教職員が98%を超えた。また、パソコンやロボットな どの教材を使用した授業や指導には自信がないという割合 が多かったが、支援や研修を希望する割合も50%を超える 結果となった。

同社では、今回の調査結果から、パソコンやロボットの操 作方法など知らないことや分からないことが多い、教職員





朝日新聞神奈川版(2019/8/16)



多少ともスキルのある方は支援可能と思いますが、学校サイドから見てあるいは教育委員会から見て、民間の人材がどのようなスキルを持ちサポートが可能か、不安が先に立ち同時に期待もしているというのが現状ではないでしょうか。また一人では対応できない事案でありますが、私にとっては幸い強力な DNY のメンバー桑原さんや市川さん富士通の石垣さん他の方々の支援によって進めることができています。

実際に「プログラミング教室」を行ってみますと、参加者が小学校1年生から5年生までを一緒に行う難しさがあります。例えば算数では、座標、掛け算・割算・余り、小数点、マイナス、角度などなど学年によってはまだ学んでいない用語が出てきます。解説書を作成しても漢字を使用できない場合はひらがな表記、あるいはフリガナを付けるなどが必要となります。

当然のことながら支援しようと考える民間人側にもこれらへの配慮が求められます。

文部科学省の下記資料を参照願います。

学習指導要領生きる力 教科別

http://www.mext.go.jp/a menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm

SDGs への取り組み

SDG s を知るきっかけはクローズアップ現代を長年担当してきた国谷裕子さんによる隠岐の島の海士町レポートです。

https://www.asahi.com/special/sdgs/amacho/

海士町の住民30名がSDGsの視点で自己評価しているのを観て、SDGsは決して難しい話ではなく一人ひとりが対応すべき身近なテーマであることがわかります。

さらに SDGs の手法としてバックキャスティングによる視点で DNY の活動を捉えることに意義があるのではとの思いで作成したものが次のものです。この背景には次のようなことも含まれています。

- 1)DNY の活動は一時よりはシュリンクしているが、今後も社会的意義のあるニーズはあり継続すべきと考えられます。
- 2)DNY のキーマンが相次いで亡くなったこともあり危機感がありました。私も 77 歳、残された人生を少しでも見通したい。そしてバトンタッチしたい。
- 3)新しい分野への好奇心もあります。

などと考えながら作成してみました。

以上参考になれば幸いです。

DNYの将来を見据えて、SDG s の視点から何をゴールとして、

